

不定詞関係節における関係詞の 移動の制限*

西 前 明

1. はじめに

(1) は不定詞関係節の例である。(1a) は関係詞が顕在化している例であり、(1b) は顕在化していない例である。

- (1) a. the cot [on which to sleep __]
b. the cot [to sleep on __]

Ross (1986: 231) は、不定詞関係節において、空所が埋め込まれた定形節の中にあると容認度が下がると述べている。また、石居 (1985: 73) は、空所を埋め込まれた for 不定詞節の中に置くことはできないと述べている。両者の現象を (2a) と (2b) で示す (Ross と石居が実際に挙げた例は (49) と (52) で見る)。(3) は定形関係節の例であり文法的である。

- (2) a. *the cot [on which to arrange [that Mary should sleep __]]
b. *the cot [on which to arrange [for Mary to sleep __]]

* 本稿は、日本語学会第155回大会(2017年11月25・26日、於立命館大学)における口頭発表に修正・発展を加えたものである。外池滋生氏、野村忠央氏、並びに査読者の方々より貴重なご助言を頂き、また、Charles Laurier氏、Michael Smith氏、Joseph Dilenschneider氏にインフォーマントとしてご協力頂いた。厚くお礼申し上げます。本稿における不備の責任は全て筆者にある。

- (3) a. the cot [on which I could arrange [that Mary should sleep ___]]
 b. the cot [on which I could arrange [for Mary to sleep ___]]

本稿の目的は、不定詞関係節の構造を定式化すると共に、(2) のような例に見られる、不定詞関係節における空所の埋め込みの深さに関する制限、言い換えると、関係詞の移動の制限を、変形生成文法理論的に説明あるいは記述することである。(3) のような例に見られる wh 句の移動は、変形生成文法理論において、wh 句の連続循環移動 (successive cyclic movement) を示す証拠とされてきた (Chomsky (1995: 44) を参照)。すなわち、(4) のような島からの抜き出しでない限り、wh 句は節の外への移動を許されるはずである。しかし (2) は島からの抜き出しではない。(2) はなぜ非文法的なのか。筆者が知る限り有力な説明はない。なぜ非文法的なのかが説明されなければ、(2) は wh 移動の連続循環適用の反例となってしまう！。

- (4) *the cot [on which I wonder [whether Mary can sleep ___]]

本稿の構成は以下の通りである。2 節で不定詞関係節の構造について仮説を立てる。3 節で不定詞関係節における関係詞の移動の制限に関して事実の確認を行う。4 節で問題の移動の制限を説明する方法を提案する。

2. 不定詞関係節の構造

2.1. 不定詞関係節と物の使用目的を表す前置詞句 for -ing

(5) は物の使用目的を表す前置詞句 for -ing の例である (Swan (2016: entry 468) を参照)。(6) は不定詞関係節の例である。(5) のような例と比較しながら、不定詞関係節の構造について考える。

- (5) a. the sofa [for sleeping on ___]
 b. the fork [for eating olives with ___]
 (6) a. the sofa [to sleep on ___]
 b. the fork [to eat olives with ___]

2.1.1. 空所

(5) で見ると、for -ing では、不定詞関係節と同様に、目的語が顕在化しない前置詞の生起が可能である²。(7) で示す通り、前置詞の目的語を単純に省略することはできないことから、(5) の構造には、不定詞関係節と同様に、関係詞が含まれていると仮定する。(5) に関係詞が含まれているとすれば、素朴に考えると、それは前置詞の目的語の位置で基底生成され、そこから PP の指定部に移動するということになるだろう。(5)・(6) の構造を (8)・(9) のようにそれぞれ仮定する。(8) の for -ing を for 関係節と呼ぶことにする (for -ing は PP であり、節と呼ぶのは適当ではないかもしれないが)。(which はその音韻素性が削除されたことを表す。移動の痕跡については、Chomsky (1995: 206) のコピー理論 (copy theory) に従う。)

- (7) a. I slept on *(the sofa).
 b. I ate olives with *(the fork).
 (8) a. the sofa [_{PP} which for sleeping on which]
 b. the fork [_{PP} which for eating olives with which]
 (9) a. the sofa [which to sleep on which]
 b. the fork [which to eat olives with which]

本稿の目的は、1 節で述べたように、不定詞関係節において、関係詞を埋め込まれた節の中から移動させることができない理由を述べることであるが、この現象は、(10) で示す通り、for 関係節にも確認できる。(11) は不定詞関係節の例である。for 関係節と不定詞関係節は、空所の埋め込みの深さ、すなわち、関係詞の移動に関して同じ制限を受けると考えられる。

- (10) a. the tool [_{PP} which for demonstrating the gravity effect with which]
 b. *the knife [_{PP} which for demonstrating [that you could easily cut up the onions with which]]
 (11) a. the tool [which to demonstrate the gravity effect with which]
 b. *the knife [which to demonstrate [that you could easily cut up the onions with which]]

2.1.2. 関係詞の顕在化

不定詞関係節において関係詞が顕在化するの、(12)・(13)で示す通り、前置詞を随伴する場合に限られる。

(12) the fork [with which to eat olives __]

(13) the fork [(~~*which~~) to eat olives with __]

for関係節では、(14)・(15)で示す通り、(関係詞を含むと仮定すれば)関係詞は常に省略される。(本稿では、関係詞の省略はその音韻素性の削除であると仮定する。)

(14) ~~*the~~ fork [with which for eating olives __]

(15) the fork [(~~*which~~) for eating olives with __]

2.1.3. 文法範疇

物の使用目的を表すfor -ingは、(16)で示す通り、be動詞に後続することもできる。(16)は不定詞を用いて(17)のように言い換えることができる。

(16) Is that cake for eating or just for looking at? (Swan 2016: entry 468)

(17) Is that cake to eat or just to look at?

(16)・(17)の例は、(5)・(6)と同じく、目的語が顕在化しない前置詞を含んでいる。ゆえに、これらの例にも関係詞が含まれていると考え、(18a)・(18b)のような例の構造を(19a)・(19b)のようにそれぞれ仮定する。すなわち、(19a)のfor -ingはfor関係節であり、(19b)の不定詞節は不定詞関係節である。

(18) a. The fork is [for eating olives with __].

b. The fork is [to eat olives with __].

(19) a. The fork is [_{PP} ~~which~~ for eating olives with ~~which~~].

b. The fork is [~~which~~ to eat olives with ~~which~~].

2. 1. 1. 節の (10)・(11) で示した通り、先行詞を直接修飾する不定詞関係節と for 関係節において、関係詞を埋め込まれた節の中から移動させることはできないが、この現象は、(20) で示す通り、be 動詞に続く構造においても確認できる。

- (20) a. *The knife is [_{PP} ~~which~~ for demonstrating [that you could easily cut up the onions with ~~which~~]]
 b. *The knife is [~~which~~ to demonstrate [that you could easily cut up the onions with ~~which~~]]

(18b) は文法的であるが、(21) は非文法的である。(21) は、関係詞が顕在化した不定詞関係節が be 動詞に続く例である³。不定詞関係節は関係詞が顕在化しなければ be 動詞に後続できるが、定形関係節の場合は、(22) で示す通り、関係詞が顕在化してもしなくても be 動詞に後続することはできない。

- (21) *The fork is [with which to eat olives ____].
 (22) a. *The fork is [_{CP} with which you eat olives ____].
 b. *The fork is [_{CP} (that) you eat olives with ____].

for 関係節 (= PP) は be 動詞に後続できるが、定形関係節 (= CP) はできない。関係詞が顕在化しない不定詞関係節は前者と同じふるまいを見せ、関係詞が顕在化する不定詞関係節は後者と同じふるまいを見せる。関係詞が顕在化しない不定詞関係節の文法範疇は PP であり、顕在化する不定詞関係節は CP であるとそれぞれ仮定すると、(23) の対立の原因を、両関係節の文法範疇の違いに求めることが可能になる⁴。すなわち、(23b) が悪いのは、(22) が悪いのと同じ何らかの理由からであると考ええる。

- (23) a. The fork is [_{PP} to eat olives with ____].
 b. *The fork is [_{CP} with which to eat olives ____].

関係詞が顕在化しない不定詞関係節が PP であると仮定すれば、それに含まれる関係詞は、for 関係節の関係詞と同様に、PP の指定部を占め、そこで

音韻素性の削除を受けることになる。関係詞が顕在化する不定詞関係節の関係詞は、定形関係節の関係詞と同様に、CPの指定部を占める。(23)の構造は(24)のようになる。

- (24) a. The fork is [PP which to eat olives with which].
b. *The fork is [CP with which to eat olives with which].

2.1.4. まとめ

不定詞関係節の構造を定式化するにあたり、不定詞関係節と物の使用目的を表す前置詞句 for -ing (関係詞を含んでいると仮定し、for関係節と名付けた)、および、定形関係節の統語的比較を行った。次の点に注目したい：1) 不定詞関係節だけでなく、for関係節でも、関係詞を埋め込まれた節の中から移動させることはできない；2) 関係詞が顕在化する不定詞関係節と定形関係節はbe動詞に後続できないが、関係詞が顕在化しない不定詞関係節とfor関係節は後続できる。不定詞関係節とfor関係節の類似性を基に、本稿は次のように仮定する：1) 不定詞関係節のtoは、for関係節のforと同じく、前置詞の範疇素性を持つ；2) to、および、forの指定部に関係詞が入り、そこで音韻素性を削除される。この構造を次の節で定式化する。

2.2. 不定詞関係節の構造の定式化

2.2.1. 文法範疇

不定詞関係節のTPに関して、(25)を仮定する⁵。不定詞関係節のTPをprepositional TP (= pTP)と呼ぶことにする。pTPは文中でTPだけでなくPPと同じ位置を占めることができると仮定する。(26a)ではTPのようにCPの補部を占め、(26b)では、(26c)のPPのように修飾語として名詞句に直接付加される⁶。

- (25) 不定詞関係節を構成するTPの主要部toは前置詞の範疇素性 [+p] を持つ。
(26) a. the fork [CP [pTP to eat olives with ___]]
b. the fork [pTP to eat olives with ___]
c. the fork [PP for eating olives with ___]

2.2.2. 関係詞の着地点

不定詞関係節における関係詞の着地点は、pTPの指定部とCPの指定部であると仮定する。wh句の移動を要請する何らかの仕組みが必要である。本稿ではRizzi (1996: 64) のWh基準を用いることにする。ここで、不定詞関係節の主要部が持つ素性 [+wh] について (28) を仮定する⁷。

(27) Rizzi (1996: 64) の *Wh* -Criterion:

A. A *wh*-operator must be in a Spec-head configuration with X^0 [+wh].

B. An X^0 [+wh] must be in a Spec-head configuration with a *wh*-operator.

(28) 不定詞関係節を構成する空補文標識CとpTPの主要部toは素性 [+wh] を持つ。

2.2.3. 関係詞の省略

関係詞の省略は音韻部門における音韻素性の削除の結果であると仮定し、(29) を規定する⁸。(29) の下では、不定詞関係節において、CPの指定部で顕在化するものはPPのみであり、pTPの指定部で顕在化するものは一切ないということになる⁹。

(29) a. 不定詞関係節のpTPの指定部を占める要素は音韻素性の削除を受ける。

b. 不定詞関係節のCPの指定部を占める要素は、PPを除いて、音韻素性の削除を受ける。

2.2.4. 派生

不定詞関係節の具体的な派生を見る。(25)・(28)・(29) を仮定すると、不定詞関係節の構造は (31a, b)・(32a) のようになる。(31) は関係詞が顕在化しない (30a) の構造であり、(32) は顕在化する (30b) の構造である。(C/to ([+wh]) は、C/toが⁸ [+wh] を持つことを表す。)

(30) a. the fork [to eat olives with ___]

b. the fork [with which to eat olives ___]

- (31) a. the fork [_{CP} **which** C([+wh]) [_{pTP} **which** PRO to([+wh]) eat olives with **which**]]
 b. the fork [_{pTP} **which** PRO to([+wh]) eat olives with **which**]
- (32) a. the fork [_{CP} with which C([+wh]) [_{pTP} ~~with which~~ PRO to([+wh]) eat olives ~~with which~~]]
 b. *the fork [_{pTP} ~~with which~~ PRO to([+wh]) eat olives ~~with which~~]

関係詞が顕在化しない (30a) の構造は、(31a) と (31b) の二つが可能である (注 6 を参照)。関係節全体の文法範疇は、(31a) では CP であるが、(31b) では pTP である。pTP の指定部では多重指定部 (multiple specifiers) を仮定する (Chomsky (1995: 355-362) を参照)。関係詞は PRO と共に pTP の指定部を占め、Wh 基準を満たす。CP の場合、関係詞は pTP の指定部を経由して、CP の指定部に入り、両方の位置で Wh 基準を満たす¹⁰。

関係詞が顕在化する (30b) の構造は、(32a) のみである。(32a) の関係節の文法範疇は CP である。(32b) では、pTP の指定部にある with which の音韻素性が削除されていない¹¹。これは (29a) の削除規則に反する。すなわち、関係詞が顕在化しない不定詞関係節の文法範疇は、CP だけでなく pTP も可能であるが、関係詞が顕在化する不定詞関係節の範疇は常に CP である。

(33) は非文法的な不定詞関係節の例であるが、これも (29) の削除規則によって排除する。(34) は (33) の構造である。

- (33) *the fork [which to eat olives with ___]
- (34) a. *the fork [_{pTP} which PRO to([+wh]) eat olives with **which**]
 b. *the fork [_{CP} which C([+wh]) [_{pTP} ~~which~~ PRO to([+wh]) eat olives with **which**]]

(34a) では、pTP の指定部に which の音韻素性が削除されずに残っているので、(29a) の削除規則に違反する。(34b) では、CP の指定部に which の音韻素性が残っているので (29b) の削除規則に違反する。CP の指定部に音韻素性を残せるのは PP だけである (注 9 を参照)。

2.2.5. be動詞に後続する場合

2.1.3.節で見たように、関係詞が顕在化しない不定詞関係節は、for関係節 (= PP) と同じく、be動詞に後続できるが、関係詞が顕在化する不定詞関係節は、定形関係節 (= CP) と同じく、be動詞に後続することはできない。(25)・(28)・(29)を仮定すると、(35)の構造は(36)である(すなわち、be動詞に後続する関係詞が顕在化しない不定詞関係節は、CPではなくpTPである)と主張できる。

- (35) a. The fork is [to eat olives with ____].
 b. *The fork is [with which to eat olives ____].
- (36) a. The fork is [_{pTP} **which** PRO to([+wh]) eat olives with **which**].
 b. *The fork is [_{CP} with which C([+wh]) [_{pTP} ~~with-which~~ PRO to([+wh]) eat olives ~~with-which~~]].

(37)のようなfor関係節については、(39)を仮定するとその構造は(38)のようになる¹²。

- (37) The fork is [for eating olives with ____].
- (38) The fork is [_{PP} **which** for ([+wh]) eating olives with **which**].
- (39) a. for関係節 (= PP) のfor (= P) は [+wh] を持つことが可能である。
 b. for関係節の指定部を占める要素は音韻素性の削除を受ける。

(36a)の関係節はpTPである。(36a)は文法的であるが、(36a)のpTPをfor関係節のPPに取り替えた(38)も文法的である。(36b)の関係節はCPである。(36b)は非文法的であるが、(36b)のCPを定形関係節のCPに取り替えた(40)も非文法的である。

- (40) a. *The fork is [_{CP} with which you eat olives ~~with-which~~].
 b. *The fork is [_{CP} **which** (that) you eat olives with **which**].

(36)のような構造を仮定すると、2.1.3.節で述べたように、(36)の対立の原因を、関係詞が顕在化する不定詞関係節と顕在化しない不定詞関係節

の文法範疇の違いに求めることが可能になる。すなわち、(36b) が悪いのは、(40) が悪いのと同じ何らかの理由からであると考える（この理由については今後の課題とする）¹³。

2.2.6. 不定詞の主語

2.2.2 節の (28) で、不定詞関係節の空補文標識CとpTPのtoは [+wh] を持つと仮定したが、顕在的補文標識のforについては、(41) を仮定する。

(41) 補文標識forは [+wh] を持たない。

(42) のような表現の構造は (43) のようになると仮定する。(43) において、不定詞の主語はPROであり、for youは不定詞節とは独立した前置詞句である（for句の正確な構造的な位置、および、PROの制御については今後の課題とする）。

(42) the fork for you to eat olives with

(43) the fork [PP for you] [pTP **which** PRO to([+wh]) eat olives with **which**]

(44) のような構造は不適格である。(44a) では、forに [+wh] がいないため、CPの主要部と指定部の間でWh基準が成立しない¹⁴。(44b) では、関係詞がCPの指定部まで来ていない。関係詞は関係節の最も構造的に高い指定部に生起しなければならないと仮定すると、(44b) は不適格となる。

(44) a. *the fork [CP which for() [pTP **which** you to([+wh]) eat olives with **which**]]

b. *the fork [CP for() [pTP **which** you to([+wh]) eat olives with **which**]]

(45) で示す通り、言うまでもなく、補文標識のforがなければ、顕在的主語は生起できない。forから格をもらうことができなくなるからである。すなわち、(41) を仮定することは、不定詞関係節について、(46) を仮定することを意味する。

(45) *the fork [you to eat olives with ___]

(46) 不定詞関係節に顕在的主語は生起しない。

Berman (1974: 39) が、不定詞関係節に顕在的主語が現れない証拠として、(47) を挙げている。

- (47) a. *He has some books for there to be in the library. (Berman 1974: 39)
 b. *Here is an opportunity for advantage to be taken of. (*ibid.*)
 c. He has some books that there are in the library. (*ibid.*)
 d. Here is an opportunity that advantage can be taken of. (*ibid.*)

Berman は、(47a) の *there* と (47b) の *advantage* は不定詞の主語ではなく、*for there* と *for advantage* は不定詞節とは独立した前置詞句であると述べている。もしそうなら、(47a, b) は、そのような前置詞句の中に虚辞の *there* と慣用句要素の *advantage* が生じているために非文法的であると説明できる。(前置詞の補部は θ 位置である。虚辞の *there* は虚辞であるがゆえに θ 役を担うことができず、ゆえに θ 位置には生起しない。*take advantage of* の *advantage* は、*take* から慣用句要素としての特殊な θ 役を付与される (準項 (quasi-argument) と呼ばれる。Chomsky (1981: 38) を参照)。ゆえに通常の θ 位置には生起しない。)

本稿は Berman の観察を支持し、(46) を主張する。(46) が正しければ、(48a) のような例の構造は (48b) のようになる。

- (48) a. The fork is for you to eat olives with.
 b. The fork is [_{PP} for you] [_{pTP} ~~which~~ PRO to([+wh]) eat olives with ~~which~~].

2.2.5.節で、*be* 動詞に続く、関係詞が顕在化しない不定詞関係節は、CP ではなく pTP であると主張した。(48a) の構造が (48b) であれば、(48a) のような例についても、その主張を維持することができる。

3. 不定詞関係節における関係詞の移動の制限

3.1. 定形節からの移動

Ross (1986: 231)によると、不定詞関係節において、空所が埋め込まれた定形節の中にあると容認度が下がる。本稿のインフォーマントによってもそれは確認できた。ただし、Rossは、(49b)のような、空所が埋め込まれた定形節の主語の位置にある例に対しては、その文法性として、*を与えているが、(49c)のような例には?を与えている。しかし、本稿のインフォーマントによると、(49c)も(49b)と同じくらい悪かった。ゆえに本稿では、(49c)のような、空所が主語以外の位置にある例(50)にも*を与える。(49b)と(49c)の間に対立があるとすれば、それについては今後の課題とする。(51)は定形関係節の例である。言うまでもなく、定形関係節では、空所が埋め込まれた定形節の中にあっても問題はない。

- (49) a. Here's a knife for you to cut up the onions with. (Ross 1986: 230)
b. *Here's a knife for you to say was on the table. (*ibid.*: 231)
c. ?Here's a knife for you to say that you cut up the onions with. (*ibid.*)
- (50) a. *Here is a knife (for you) [~~which~~ to say [that you could easily cut up the onions with ~~which~~]].
b. *Here is a knife [with which to say [that you could easily cut up the onions with ~~which~~]].
c. *That is the work (for you) [~~which~~ to claim [that you can't do ~~which~~]].
- (51) a. Here is a knife [with which you would say [that you could easily cut up the onions with ~~which~~]].
b. That is the work [which you should claim [that you can't do ~~which~~]].

3.2. for不定詞節からの移動

石居(1985: 73)によると、(52a)で示す通り、不定詞関係節において、空所を埋め込まれたfor不定詞節の中に置くことはできない。ただし、石居は、(52b)で示す通り、関係詞が顕在化しない場合は文法的であると述べている。(52c)は定形関係節の例であり文法的である。

- (52) a. *I found a cot on which to arrange [for Mary to sleep ____].
 (石居 1985: 73)
 b. I found a cot to arrange [for Mary to sleep on ____]. (ibid.)
 c. I found a cot on which I could arrange [for Mary to sleep ____]. (ibid.)

しかし、(52b) についての石居の文法判断は、関係節ではなく目的節 (infinitival purposes) の解釈に基づいているのではないかと思われる。Bach (1982: 36) によれば、(53) のような例の不定詞節には、関係節と目的節の解釈がある。(52b) にも目的節の解釈がある¹⁵。(52b) の目的節の解釈は、(54) の理由節 (infinitival rationale clause) の解釈にほぼ等しい。

- (53) I bought a ledger to keep accounts in. (Bach 1982: 36)
 (54) I found a cot [(in order) to arrange [for Mary to sleep on it]].

(53) が両義的なのに対して、Jones (1985: 20) によれば、(55) のような例の不定詞節には関係節の解釈しかない：目的節（および理由節）は主語と動詞の間に生起しない。Jones に従うと、(55) や (56) のように主語と動詞の間に生起する不定詞節には、関係詞が顕在化しない場合でも、関係節の解釈しかない。

- (55) The man to talk to is here. (Jones 1985: 20)
 cf. *The man [(in order) to talk to him] is here.
 (56) a. *The cot [~~which~~ to arrange [for Mary to sleep on ____]] is over there.
 b. *The cot [on which to arrange [for Mary to sleep ____]] is over there.

(56a) は、(56b) と同じく容認されない。すなわち、関係詞が顕在化しない (56a) と顕在化する (56b) の間に対立はない。ゆえに、不定詞関係節において、関係詞が顕在化しようがしまいが、空所を for 不定詞節の中に置くことはできないと結論できる。この現象に関して、石居が述べるような関係詞の顕在化と非顕在化の対立は存在しない。

4. 不定詞関係節における関係詞の移動の制限の説明

4.1. 不定詞関係節における不適正移動

3節で見た不定詞関係節における関係詞の移動の制限を(57)でまとめる。

(57) 不定詞関係節において、埋め込まれた定形節と for 不定詞節から関係詞を移動させることはできない。

本稿では、不定詞関係節に見られる(57)の移動の制限を、(58)のようないわゆる不適正移動(improper movement)の現象として説明することを提案する。不適正移動は(59)のように、A/A'位置は(60)のようにそれぞれ定義する^{16,17}。(John(A/A'))は、Johnが占める位置がA/A'位置であることを表す。

(58) a. *John(A) is believed [CP ~~John~~(A') [TP it is likely [TP ~~John~~ to ~~John~~ win]]].
(Lasnik and Saito 1992: 94) (一部修正)

b. *It is natural for John(A) to be believed [CP ~~John~~(A') (that) [TP it is likely [TP ~~John~~ to ~~John~~ win]]].

(59) 不適正移動：A'位置からA位置に移動することはできない。

(60) A位置は、語彙範疇の指定部と補部、および、TPの指定部と補部である。それ以外の位置はA'位置である。

(58)において、JohnはCPの指定部を經由して上位節の主語の位置(=TPの指定部)に移動している。(60)のA/A'位置の定義に従うと、CPの指定部はA'位置であり、TPの指定部はA位置である。すなわち、JohnのCP指定部からTP指定部への移動は、(59)が禁じるA'位置からA位置への不適正移動である。

(57)の現象を(59)の不適正移動によって説明したい。まず(61)・(62)の文法的な例を見る。(b)は(a)の構造である。(以下、特に必要な場合を除いて、PRO、および、[+wh]の表示は省く。)

(61) a. the cot [to sleep on _]

- b. the cot [_{pTP} **which**(A) to sleep on **which**(A)]
- (62) a. the cot [on which to sleep __]
- b. the cot [_{CP} on which(A') C [_{pTP} ~~on~~-**which**(A) to sleep ~~on~~-**which**(A)]]

(61)において、関係詞は、前置詞の補部の位置からpTPの指定部に移動している。前置詞は語彙範疇なので、その補部は、(60)の定義により、A位置となる。pTPはTPであると同時に語彙範疇でもある。前者としても後者としても、その指定部はA位置となる。ゆえに(61)における関係詞の移動は、A位置からA位置への適正移動である¹⁸。(62)では、関係詞が前置詞を随伴して移動している。Chomsky (1995: 331)は、 θ 付与されない副詞類がVの補部や指定部に生起する構造を仮定し、ゆえにそれはA位置にあると仮定している¹⁹。この線に沿って考えると、[P+関係詞]は、 θ 付与されていないがいまいが、その基底位置はA位置であるとみなすことができる。(62)において、[P+関係詞]はpTPの指定部を経由してCPの指定部へ移動する((28)・(31)・(32)を参照)が、この移動にも、A'位置からA位置への不適正移動は含まれない。

次に(63)–(66)の非文法的な例を見る。(63)・(64)はthat節からの移動であり、(65)・(66)はfor不定詞節からの移動である。(67)・(68)は定形関係節の例であり、それらは文法的である。

- (63) a. *the cot [to arrange [that Mary should sleep on __]]
- b. *the cot [_{pTP} **which**(A) to arrange [_{CP} **which**(A') that Mary should sleep on **which**(A)]]
- (64) a. *the cot [on which to arrange [that Mary should sleep __]]
- b. *the cot [_{CP} on which(A') C [_{pTP} ~~on~~-**which**(A) to arrange [_{CP} ~~on~~-**which**(A') that Mary should sleep ~~on~~-**which**(A)]]]
- (65) a. *the cot [to arrange [for Mary to sleep on __]]
- b. *the cot [_{pTP} **which**(A) to arrange [_{CP} **which**(A') for Mary to sleep on **which**(A)]]
- (66) a. *the cot [on which to arrange [for Mary to sleep __]]
- b. *the cot [_{CP} on which(A') C [_{pTP} ~~on~~-**which**(A) to arrange [_{CP} ~~on~~-**which**(A') for Mary to sleep ~~on~~-**which**(A)]]]

(67) the cot [_{CP} on which(A') C [_{TP} I could arrange [_{CP} ~~on which~~(A') that Mary should sleep ~~on which~~(A)]]]

(68) the cot [_{CP} on which(A') C [_{TP} I could arrange [_{CP} ~~on which~~(A') for Mary to sleep ~~on which~~(A)]]]

(63)–(68)において、関係詞はthat節およびfor不定詞節から外に出るとき、その指定部を経由する。that節とfor不定詞節はともにCPである。変形生成文法理論において、CPの指定部は必ず立ち寄らなければならない位置、比喩的に言うと、そこからしか外に出られない脱出口 (escape hatch) であるとされてきた。CPの指定部を経由させる具体的な仕組みとしては、下接の条件 (subjacency condition)、障壁 (barrier)、位相 (phase) などが提案された (Chomsky (1981)、Chomsky (1986)、Chomsky (2008) をそれぞれ参照)。本稿ではそのような仕組みについては中立的な立場をとり、CPから出るときは必ずその指定部を経由するということだけを規定する。

(69) CPからの移動はその指定部を経由する。

(63)–(66)において、関係詞はCPの指定部を経由した後、pTPの指定部に入る。CPの指定部はA'位置であり、pTPの指定部はA位置である。ゆえに、関係詞のCP指定部からpTP指定部への移動は、A'位置からA位置への不適正移動である。(67)・(68)の定形関係節の場合は、CPの指定部から上位のCPの指定部へ直接移動する。これはA'位置からA'位置への適正移動である。

4.2. for 関係節と like 節

2.1.1.節で、for関係節と不定詞関係節は、関係詞の移動に関して同じ制限を受けると述べた。(70a) (= (10b)) で示す通り、for関係節においても、埋め込まれた節から関係詞を移動させることはできない。4.1.節で、不定詞関係節における移動の制限を不適正移動の現象として説明したが、for関係節における移動の制限も同様に説明される。(70a)の構造は(70b)のようになる。

- (70) a. *the knife [_{PP} **which** for demonstrating [that you could easily cut up the onions with **which**]]
 b. *the knife [_{PP} **which**(A) for([+wh]) demonstrating [_{CP} **which**(A') that you could easily cut up the onions with **which**(A)]]

(70b)において、関係詞はCPの指定部を経由した後、PPの指定部に入る((39)を参照)。CPの指定部はA'位置であり、PPの指定部はA位置である。ゆえに、関係詞のCP指定部からPP指定部への移動は、A'位置からA位置への不適正移動である。

for関係節および不定詞関係節における不適正移動が、like節でも起こると主張できる可能性がある。本稿のインフォーマントには、(71a)を容認する者と容認しない者がいた²⁰。しかし容認する話者も(71b)は容認しない。(71b)では、空所が埋め込まれた節の中にある。(72)は定形関係節の例であり文法的である。

- (71) a. %He might make an error [like the world has never seen ____].
 b. *He might make an error [like anyone would say [that the world has never seen ____]].
 (72) a. He might make an error [that the world has never seen ____].
 b. He might make an error [that anyone would say [that the world has never seen ____]].

(71b)の構造は、(73)であると仮定する。(73)において、likeは、for関係節のforと同様に、Pであり、かつ、[+wh]をとる。指定部の関係詞の音韻素性は削除される。

- (73) *He might make an error [_{PP} **which**(A) like([+wh]) anyone would say [_{CP} **which**(A') that the world has never seen **which**(A)]].

(73)において、関係詞はCPの指定部を経由した後、PPの指定部に入る。CPの指定部はA'位置であり、PPの指定部はA位置である。ゆえに、関係詞のCP指定部からPP指定部への移動は、A'位置からA位置への不適正移

動である。

(71b)の構造が(73)であるという仮定が正しければ、不定詞関係節およびfor関係節における不適正移動と同種の不適正移動がlike節でも起こると主張できる²¹。

4.3. 制御動詞の不定詞補文からの移動

4.3.1. 不定詞補文からの移動

4.1.節では、不定詞関係節における関係詞の移動の制限を(57)のように記述し、それを不適正移動の現象として説明した。定形節とfor不定詞節はともにCPである²²。定形節とfor不定詞節をCPと言い換えて、(57)を(74)のように一般化できるかを考える。

(74) 不定詞関係節において、埋め込まれたCPから関係詞を移動させることはできない。

定形節とfor不定詞節以外のCPとして、空補文標識Cが作る不定詞節CPが考えられる。そのようなCPの候補として、目的語制御動詞(object-control verb)の不定詞補文を挙げたい。(75b)で示す通り、不定詞関係節において、convinceのような目的語制御動詞の不定詞補文から関係詞を移動させることはできない²³。(75c)は定形関係節の例であり文法的である。目的語制御動詞の不定詞補文が、空補文標識Cを主要部とするCPであると仮定すると、(75b)の構造は(76)のようになる。(関係詞が顕在化するか否かはこの節の議論を左右しないので、顕在化した例のみ挙げることにする。)

- (75) a. the shelf [in which to set all of the books ___]
b. ??the shelf [in which to convince Mary [to set all of the books ___]]
c. the shelf [in which I could convince Mary [to set all of the books ___]]
(76) ??the shelf [CP in which(A') C [pTP ~~in which~~(A) to convince Mary [CP ~~in which~~(A') C to set all of the books ~~in which~~(A)]]

(76)において、関係詞はconvinceの補部の不定詞節CPの指定部を経由した後、pTPの指定部に入る。CPの指定部はA'位置であり、pTPの指定部は

A位置である。ゆえに、関係詞のCP指定部からpTP指定部への移動は、A'位置からA位置への不適正移動である。このように、目的語制御動詞の不定詞補文がCPであると仮定すると、不定詞関係節において、目的語制御動詞の不定詞補文から関係詞を移動させることができないという(75b)の事実は、不適正移動の現象として説明できる。

次に主語制御動詞 (subject-control verb) の不定詞補文について考える。(77)で示す通り、不定詞関係節において、tryのような主語制御動詞の不定詞補文から関係詞を抜き出しても非文法的にはならない。すなわち、(75b)で見た目的語制御動詞の場合に生じる移動の制限は、主語制御動詞の場合には観察されない。主語制御動詞の不定詞補文がCPではなくTPであると仮定すると、(77)の構造は(78)のようになる。

(77) the shelf [in which to try [to set all of the books ___]]

(78) the shelf [_{CP} in which(A') C [_{pTP} ~~in which~~(A) to try [_{TP} to set all of the books ~~in which~~(A)]]

(78)において、関係詞は、CP指定部のようなA'位置を経由せずに、pTPの指定部に入る。ゆえに、(78)の関係詞の移動に、A'位置からA位置への不適正移動は含まれない。このように、目的語制御動詞の不定詞補文はCPであり、主語制御動詞の不定詞補文はTPであると仮定すると、(75b)と(77)の対立は説明できる。

4.3.2. 不定詞補文の文法範疇

4.3.1.節で、(75b)と(77)の対立を説明するために(79)を仮定した。この節では(79)を検証する。

(79) 目的語制御動詞の不定詞補文はCPであり、主語制御動詞の不定詞補文はTPである。

Bošković (1996) は、tryのような主語制御動詞の不定詞補文はIP (本稿ではTPと表示する) であると主張している。これに従うと、(80a)のような文の構造は(80b)のようになる。

- (80) a. The terrorists tried [to hijack an airplane].
b. The terrorists tried [_{TP} to hijack an airplane].

Boškovićは、tryの不定詞補文がCPではなくTPである根拠として、(81)の擬似分裂文 (pseudo-cleft sentence) の現象を挙げている。

- (81) a. What the terrorists tried was [to hijack an airplane].
(Bošković 1996: 282) (一部修正)
b. *What I believe is [they will hijack an airplane]. (ibid.) (一部修正)
(82) a. What I believe is [that they will hijack an airplane].
b. What I convinced Mary was [that she should set all of the books in the shelf].
(83) I believe [(that) they will hijack an airplane].

(81a)で見ると、tryの不定詞補文は擬似分裂文の焦点(すなわち、擬似分裂文におけるbe動詞に続く要素)になれるが、(81b)で見ると、補文標識のthatを省略した定形節は焦点になれない((82)で示す通り、thatを省略しなければ文法的である)。すなわち、that節のthatは、(83)のような構造では省略できるが、擬似分裂文の焦点の位置では省略できない。Boškovićは、(81)の構造を(84)のように仮定している。

- (84) a. What the terrorists tried was [_{TP} to hijack an airplane].
b. *What I believe is [_{CP} C [_{TP} they will hijack an airplane]].

(84a)のtryの補文であり、かつ、擬似分裂文の焦点である不定詞節は、CPの殻をかぶらないTPである。(84b)のbelieveの補文であり、かつ、焦点の位置にある定形節は、空補文標識Cが作るCPである(注22を参照)。Boškovićは、(84b)が非文法的なのは、擬似分裂文の焦点の位置に、空補文標識を主要部とする節があるからだと主張している²⁴。(84a)の焦点にそのような節はない。

ここで、convinceのような目的語制御動詞の不定詞補文が擬似分裂文の焦点になれるかを問題にしたい。(85b)で示す通り、convinceの不定詞補

文は擬似分裂文の焦点になれない。(that節を焦点とする(82b)は文法的である。)空補文標識Cを主要部とするCPは擬似分裂文の焦点になれないが、(Cに選択されていない)TPは焦点になれる、というBoškovićの分析に従うと、(85)の構造は(86)のようになる。

- (85) a. What I tried was [to set all of the books in the shelf].
 b. *What I convinced Mary was [to set all of the books in the shelf].
- (86) a. What I tried was [TP to set all of the books in the shelf].
 b. *What I convinced Mary was [CP C [TP to set all of the books in the shelf]].

tryのような主語制御動詞が補部としてTPを選択するのに対して、convinceのような目的語制御動詞は、(86b)で示す通り、CPを選択する。(86b)が非文法的なのは、擬似分裂文の焦点の位置に空補文標識を主要部とする節があるからである。

(85)の擬似分裂文の現象を説明するために仮定した(86)の構造において、主語制御動詞の不定詞補文はTPであり、目的語制御動詞の不定詞補文はCPである。両者の不定詞補文の範疇は(79)の仮定と矛盾しない。ゆえに、擬似分裂文の現象は(79)の根拠となる。

4.3.3. まとめ

擬似分裂文の現象を根拠にして、(tryのような主語制御動詞の不定詞補文はTPであるが、)convinceのような目的語制御動詞の不定詞補文はCPであると仮定すると、(75b)の現象は、(74)の現象の一つとみなすことができる(注23を参照)。(74)の現象は、4.1.節で詳しく述べたように、関係詞の不適正移動として説明される。(77)については、CPからの移動ではないので、不適正移動にはならない。

5. 結び

不定詞関係節において、埋め込まれたCPから関係詞を移動させることができない現象を、(A'位置からA位置への)不適正移動の現象として説明し

た。不定詞関係節の *to* は前置詞の範疇素性を持ち、prepositional TP (= pTP) を作るという仮説 (I) と pTP の指定部に関係詞が入るとする仮説 (II) を立てた。pTP は TP であると同時に語彙範疇 (P) でもあるので、前者としても後者としても、その指定部は A 位置となる。ゆえに、CP 指定部のような A' 位置から pTP 指定部への移動は不適正移動となる。

仮説 (I) と (II) を支持する根拠として、不定詞関係節と物の使用目的を表す前置詞句 *for -ing* との統語的類似性をあげた。この前置詞句では、不定詞関係節と同じく、目的語が顕在化しない前置詞の生起が可能であり、さらに、空所を埋め込まれた節の中に置くことができない。この表現に関係詞と (PP 指定部への) その移動が含まれていると仮定すると (この構造を *for* 関係節と名付けた)、これも不適正移動の現象として捉えることができる。

注

1. 空所を埋め込まれた定形節の中に置くことができない現象は、*tough* 構文においても見られるとする、(i) のような観察がある。しかし、一方では、そのような構造を文法的とする、(ii) のような観察もある。*tough* 構文における現象については、今後の課題とする。

(i) ?*These flowers would be easy for you to say [that you had found ___].

(Ross 1967: 228)

(ii) John is easy to believe [Mary would kiss ___]. (Pollard and Sag 1994: 168)

2. 物の使用目的を表す *for -ing* において、先行詞を意味上の目的語とする前置詞は省略することもできる。*the sofa [for sleeping]* のような前置詞を省略した形については本稿では論じない。不定詞関係節では、(i) で示す通り、前置詞の省略は許されない。

(i) the sofa [to sleep *(on)]

3. 関係詞が顕在化しない不定詞関係節も、全てが *be* 動詞に後続できる訳ではない。例えば、(i) のような例は文法的であるが、(ii) のような例は非文法的である。(i) は、*for* 関係節を用いて (iii) のように言い換えることができる。すなわち、(i) の不定詞関係節は物の使用目的を表している。

(i) The fork is [to eat olives with ___].

(ii) *The fork is [to sterilize ___].

(iii) The fork is [for eating olives with ___].

(ii) は悪いが、(iv) は文法的である。(iv) は (v) のように言い換えることはできないので、(iv) の不定詞関係節に物の使用目的の解釈はない。(iv) の

不定詞関係節は、shouldのような法助動詞を含む定形関係節を用いて、(vi)のように言い換えることができるので、法的意味を表している。

(iv) the fork [to sterilize __]

(v) *the fork [for sterilizing __]

(vi) the fork [that you should sterilize __]

物の使用目的は法的意味ではない。(i)の不定詞関係節はcanの意味を表さない。(i)は、(iii)だけでなく、法助動詞を含まない定形関係節を用いて(vii)のように言い換えることができるが、(i)と(viii)は意味が異なる。(viii)はcanを用いた定形関係節の例である。(i)・(iii)・(vii)と(viii)の意味の違いは、(ix)と(x)の対立として確認できる。

(vii) This is the fork [that you eat olives with __].

(viii) This is the fork [that you can eat olives with __].

(ix) a. *The fork is [to eat olives with __], but it isn't an olive fork.

b. *The fork is [for eating olives with __], but it isn't an olive fork.

c. *This is the fork [that you eat olives with __], but it isn't an olive fork.

(x) This is the fork [that you can eat olives with], but it isn't an olive fork.

問題は、なぜ法的意味を表す不定詞関係節が、(ii)で示す通り、be動詞に後続できないのかということである。これについては今後の課題とする。

4. 本稿で仮定する、関係詞が顕在化しない不定詞関係節の文法範疇は、正確にはPPではなく prepositional TPである。2.2.1.節を参照。
5. 前置詞のtoが不定詞節TPのTに変化した歴史的過程については、Tanaka (1997)を参照 (Hasegawa (1998: fn. 9)も参照)。Hasegawa (1998)が、不定詞関係節における関係詞の顕在化に関する現象を説明するにあたり、不定詞関係節のTPの主要部toが前置詞の範疇素性 [+P] を(選択的に)持つと仮定している。
6. 本稿は、関係詞が顕在化しない不定詞関係節の構造として、(26a)と(26b)の両方を許すが、本稿の理論にとっては、後者が可能であれば十分である。
7. 顕在的補文標識のforについては2.2.6.節で述べる。
8. 本稿では、関係詞の顕在形と非顕在形の違いは、音韻部門で音韻素性の削除を受けるか受けないかだけであると考え。すなわち、両者は辞書の中では同一の語彙項目であり、持っている素性も同じである。
9. 不定詞関係節において関係詞が顕在化するの、前置詞を随伴する場合に限られる。この現象は、英語の不定詞関係節に関して、おそらく最も興味深い統語現象であろう。本稿で提案する(29)の音韻素性の削除規則は、この現象について責任を負っている((33)・(34)を参照)。しかし、言うまでもなく、(29)はこの現象の説明とは言えない：なぜPP以外の要素の音韻素性が義務的に削除されるのかが不明である。

Hasegawa (1998) がこの現象を変形生成文法理論的に説明している。しかし、Hasegawa (1998: 24) は、本稿が論じた Ross (1986: 231) の問題、すなわち、不定詞関係節において、空所が埋め込まれた節の中にあると容認度が下がるという問題を、残された課題の一つとしてあげている。

関係詞の顕在化に関する制限については、今後の研究の推移を見守りたい。

10. Rizzi (2006: 112) は、Wh 基準に関わる制約として、(i) の *Criterial Freezing* という条件を提出している。

(i) *Criterial Freezing: A phrase meeting a criterion is frozen in place.*

(i) は、wh 句が文中のどこかで Wh 基準を満たした後、さらに移動して別の位置で再び Wh 基準を満たすことを禁じるものである。(i) の条件に従うと、(ii) のような派生は排除される。(ii) において、which book は、下位節と上位節の両方の CP 指定部で Wh 基準を満たしている ($C_Q = C(+wh)$)。

(ii) *Which book C_Q does Bill wonder [t' C_Q she read t]? (Rizzi 2006: 112)

本稿の不定詞関係節の分析では、(32a) のような派生を仮定している。(32a) において、with which は、CP と pTP の両方の指定部で Wh 基準を満たしている。(i) の条件に従うとすれば、(32a) の派生が可能なのかが問題となる。

(i) の条件の下で (32a) を派生する方法として、Chomsky (2008: 147, 149-151) の並行移動が考えられる。Chomsky (2008) のシステムにおいて、wh 主語は TP 指定部と CP 指定部に (wh 目的語は VP 指定部と v*P 指定部に)、同時並行的に移動する。すなわち、TP 指定部から CP 指定部への移動は存在しない。並行移動が (32a) において可能なら、with which は pTP 指定部と CP 指定部に並行的に移動できる。その場合、pTP 指定部から CP 指定部への移動はない。ゆえに (i) の条件には抵触しない。一方、(ii) において、which book が下位節の CP 指定部と上位節の CP 指定部に並行的に移動することはできない。なぜなら、二つの CP は異なる位相 (phase) だからである。並行移動を仮定すると、(32a) は (i) を破らずに派生できるが、(ii) はできない。

11. (i) のような派生は許されない。with which の連鎖の先端で with の音韻素性を削除することはできないからである。which については、目的格で先行詞が物であり、which となることが文脈からわかるので復元可能であるが、一方、with は、連鎖の先端で削除されてしまうと、文の他のいかなる要素からも復元できない (石居 (1985: 73)、Chomsky (1980: 21) を参照)。

(i) *the fork [_{pTP} with-which to eat olives with-which]

12. (i) が不適格なのは、PP が、TP の一種である pTP と異なり、C の補部になれないからである。すなわち、for 関係節が空補文標識 C の補部になる構造は許されない。

(i) *The fork is [_{CP} with which C ([+wh]) [_{PP} with-which for([+wh]) eating olives with-which]]

13. 言うまでもなく、関係節でなければCPもbe動詞に後続することは可能である。関係節CPとの違いが問題であるが、今後の課題としたい。
- (i) The question is [CP with whom we should work].
14. (i) で示す通り、補文標識のforは不定詞疑問節においても用いることができない。forは [+wh] を持たないと仮定すると、(i) では、(44a) と同様に、CPの主要部と指定部の間でWh基準が成立しない。
- (i) *I don't know [CP what for you to do __].
15. (i) のような空所がfor不定詞節の中にある不定詞目的節について、本稿のインフォーマントの判断には、(ii) の不定詞関係節と同じくらい悪いとする判断 (ia) と (ii) よりは良いとする判断 (ib) があつた。これに対して、(iii) のような空所が定形節の中にある不定詞目的節は、(iv) の関係節と同じく、非文法的とされた。(Jones (1985: 20) によると、不定詞関係節は代名詞を修飾しないので、(i) と (iii) の不定詞節には目的節の解釈しかない。)
- (i) a. *I bought it [to arrange [for Mary to sleep on __]]. (目的節)
 b. ?I bought it [to arrange [for Mary to sleep on __]]. (目的節)
- (ii) *a cot [to arrange [for Mary to sleep on __]] (関係節)
- (iii) *I bought it [to arrange [that Mary should sleep on __]]. (目的節)
- (iv) *a cot [to arrange [that Mary should sleep on __]] (関係節)
- (ib) と (ii) の違いについては今のところ不明であるが、本稿の議論にとって重要なことは、(ib) の判断を下した話者も (ii) は非文法的とみなしたことである。これは、石居の (52b) についての文法判断が、関係節ではなく目的節の解釈に基づいている証拠であると思われる。
- なお、Huddleston and Pullum (2002: 1067) は、(vib) には関係節と目的節の解釈があるが、(via) に目的節の解釈はない、すなわち、findは (意味上の理由で) 目的節とは共起しないと述べている。しかし、本稿のインフォーマントは (54) の理由節の例を容認しており、ゆえに、(52b) についても目的節の解釈を許していると思われる。
- (vi) a. He found a video for the kids to watch.
 (Huddleston and Pullum 2002: 1067)
- b. He got a video for the kids to watch. (ibid.)
16. 不適正移動の理論的位置付けと定式化の詳細については議論しない。Chomsky (1986: 22, 93)、Lasnik and Saito (1992: 93-94)、Chomsky (1995: 326-327) を参照。
17. Chomsky (1995: 63-64, 196) は、A/A' 位置をL関連性 (L-relatedness) という概念で再定義している。語彙範疇Lと機能範疇T (およびAgr) の指定部と補部がL関連の位置とされる。L関連の位置が従来のA位置に、非L関連の位置が従来のA'位置にそれぞれ対応する。なお、動詞句の指定部あるいは補部

に位置する副詞句もL関連の位置にあるとされる。本稿では、L関連ではなく従来 of the A/A' という用語を用いるが、理論的にはこのL関連性によるA/A'位置の定義に従う。

18. Chomsky (2008) の位相理論では、CPとv*Pが位相として仮定されており、内部の要素がその外に出るためには、それらの指定部を経由しなければならない。例えば、(i) のような派生において、whatは下位節のv*PとCPの指定部、および、上位節のv*Pの指定部を経由して、上位節のCPの指定部に移動する。

(i) [CP What do you [v*P what you v* [VP think [CP what that John [v*P what John v* [VP bought what]]]]]?

v*P位相仮説の下で、本稿の(不適正移動による)説明を維持するためには、(ii)を規定せざるを得ない。

(ii) v*Pの指定部はA位置にもA'位置にもなれる。

(ii)に従うと、(iii)のような派生を仮定できる(下位節のv*Pの表示は省略する)。(iii)において、whatが占めるv*Pの指定部はA'位置であり(外項であるyouの位置はA位置である)、CP指定部(=A'位置)からこの位置への移動は、不適正移動ではない。

(iii) [CP What do you [v*P what(A') you v* [VP think [CP what(A') that John bought what]]]?

(ivb)は(iva)の派生である。(ivb)において、whichが占めるv*Pの指定部はA位置であり、この位置からpTP指定部(=A位置)への移動は不適正移動ではない。

(iv) a. the fork to eat olives with

b. the fork [pTP which(A) PRO to [v*P which(A) PRO v* [VP eat olives with which]]]

(vb, c)は(va)の派生である(下位節のv*Pの表示は省略する)。(vb)では、whichが占めるv*Pの指定部はA位置であり、CP指定部(=A'位置)からこの位置への移動が不適正移動となる。(vc)では、v*Pの指定部はA'位置であり、この位置からpTP指定部(=A位置)への移動が不適正移動となる。すなわち、v*Pの指定部をA位置とみなしてもA'位置とみなしても、(va)の派生は不適正移動を含むことになる。

(v) a. *the cot to arrange that Mary should sleep on

b. *the cot [pTP which(A) PRO to [v*P which(A) PRO v* [VP arrange [CP which(A') that Mary should sleep on which]]]]

c. *the cot [pTP which(A) PRO to [v*P which(A') PRO v* [VP arrange [CP which(A') that Mary should sleep on which]]]]

19. Chomsky (1995: 332, 388) は、副詞的wh句が項ではなく付加詞のふるまいをすることについて、L関連性ではなくθ関連性(θ-relatedness)の関与の可能

性を指摘している。

20. (71a) のような文の存在は外池滋生氏からご教示いただいた。
21. 2. 1. 3. 節および 2. 2. 5. 節で、for 関係節 (= PP) は be 動詞に後続できるが、定形関係節 (= CP) は後続できないことを見た。(ii) は like 節が be 動詞に続く例である。(i) を容認する話者は (ii) も容認する。しかし (iii) は容認しない。(ii) と (iii) の対立は、like 節が CP ではなく、for 関係節と同じ PP であることを示唆している。
- (i) %He might make an error [like the world has never seen ____].
- (ii) %His error is [like the world has never seen ____].
- (iii) a. *His error is [_{CP} (which) the world has never seen ____].
- b. *His error is [_{CP} (that) the world has never seen ____].
- なお、like 節が PP であると仮定すると、like は補部として TP を取れる前置詞であるということになる。この点の検証は今後の課題とする。
22. 顕在的補文標識を持たない定形節は、代わりに空補文標識を持つ(すなわち、顕在的補文標識を持たない定形節も CP である)という分析が支配的であると思われる (Stowell (1981) を参照)。本稿もこれに従う。
23. (75b) の容認度は (i)・(ii) より幾分高い。(75b) と (i)・(ii) の文法性の差については今のところ不明である。
- (i) *the shelf [in which to arrange [that Mary should set all of her books ____]]
- (ii) *the shelf [in which to arrange [for Mary to set all of her books ____]]
24. Bošković (1996) は、(84b) の構造における空補文標識 C の生起の非文法性を空範疇原理 (Empty Category Principle) によって説明している。本稿では、この非文法性を説明する仕組みについては論じない。今後の課題としたい。

参考文献

- Bach, Emmon (1982) "Purpose Clauses and Control." In Pauline Jacobson and Geoffrey K. Pullum (eds.) *The Nature of Syntactic Representation*, 35-57. Dordrecht: Reidel.
- Berman, Arlene (1974) "Infinitival Relative Constructions." *CLS* 10: 37-46.
- Bošković, Željko (1996) "Selection and the Categorical Status of Infinitival Complements." *Natural Language and Linguistic Theory* 14: 269-304.
- Chomsky, Noam (1980) "On Binding." *Linguistic Inquiry* 11: 1-46.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2008) "On Phases." In Robert Freidin, Carlos P. Otero, and Maria L. Zubizarreta (eds.) *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor*

- of *Jean-roger Vergnaud*, 133-166. Cambridge, MA: MIT Press.
- Hasegawa, Hiroshi (1998) "English Infinitival Relatives as Prepositional Phrases." *English Linguistics* 15: 1-27.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 石居康男 (1985) 「I have a topic on which to work.」『英語教育』第34卷5号、72-74. 東京: 大修館.
- Jones, Charles (1985) *Syntax and Thematics of Infinitival Adjuncts*. Doctoral dissertation, University of Massachusetts.
- Lasnik, Howard and Mamoru Saito (1992) *Move α : Conditions on Its Application and Output*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Pollard, Carl and Ivan A. Sag (1994) *Head-Driven Phrase Structure Grammar*. Chicago: University of Chicago Press.
- Rizzi, Luigi (1996) "Residual Verb Second and the *Wh*-Criterion." In Adriana Belletti and Luigi Rizzi (eds.) *Parameters and Functional Heads*, 63-90. Oxford: Oxford University Press.
- Ross, John Robert (1967) *Constraints on Variables in Syntax*. Doctoral dissertation, MIT.
- Ross, John Robert (1986) *Infinite Syntax!* Norwood, NJ: Ablex.
- Stowell, Timothy A. (1981) *Origins of Phrase Structure*. Doctoral dissertation, MIT.
- Swan, Michael. (2016⁴) *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.
- Tanaka, Tomoyuki (1997) "Minimalism and Language Change: the Historical Development of *To*-Infinitives in English." *English Linguistics* 14: 320-341.

(函館大学)

saizen@x.email.ne.jp